

の人生の間になんとかこの迷いの岸から覚りの向こうの岸に早めに渡ってしまいたいと思うのなら、苦しみに負けてはいられないわけだ。だから、やはり、苦しみにあっても負けず耐え抜く心構え、「忍辱」が必要になる。

その苦しみの中でも、対人関係の苦しみは非常に苦しい。自分の痛いのは、「痛い」といいながらなんとか我慢すればいい。しかし、対人関係の苦しさは、相手があつてなかなか逃げられない。他者からの様々な辱め、迫害に耐えながら、どう人生を覚りのチャンスに変えるかは、人生の一つの大テーマであろう。これを「他毀辱忍」という。

また、寒さ暑さがあり、いろいろ疲れることがある。しかし、そこでへたばっていたのでは先に進めない。苦しみに耐える心がないと、歩けないのだ。苦しみを安んじて受けることを「安受苦忍」という。

もう一つ注目しておきたいのは、「忍」はただそうした意志の問題だけではなく、「認識」の「認」にも通じる面があるとされていることである。「觀察法忍」といい、いま敵対し私を傷つけているように見える相手も実は自分と一つの宇宙であること、寒さも暑さも、病気も、みな宇宙の現象の一部であることを觀察・洞察することによって、それらに耐えるのである。こうした深い洞察がなければ、忍辱は単なるやせ我慢になりかねないだろう。

精進

第四は「精進」である。迷いの世界から覚りの世界までの長い長い旅をするのなら、横道にそれて道草を食っている暇はない。脇目もふらず、まっすぐに目標に向かっていくという姿勢が不可欠である。「ああ、疲れた」「ああ、面倒だ」などと言っていたのでは、長い道は終わらない。それではいつまでたっ

でも煩惱の世界から抜け出せない。ひたすら一なる世界、無なる世界に向かつて、日々うまずたゆまずじつと目を向けていかなければならない。そこに向かうためには本気でやる必要があるであり、「本気でやる」というのが精進の本質的な意味だろう。

精進にも三種があるとされていて、第一は勇み励む「敵勇精進」、第二はさらに行を加えていく「加行精進」であり、第三は「不下・難壞・無足精進」といって、決して下降することなく向上しつづけ、くじけることなく、自己満足することがない精進である。

禪定

第五は「禪定」である。心を静かにして、物事のありのままの姿をよく見、実はすべてのものが一なる、空なる世界があるということを見ていくのである。

禪定にも三種があり、第一は「安楽住定」という。禪定の初歩はまず自分が揺るぐことのない安らかな境地にしっかりとどまる禪定である。第二は「引神通定」といって、ばらばらに分離したと思われる常識の世界ではありえないような奇跡的なことを起こす力に神通力を引き起こすような禪定である。仏教では、禪定によってある種の超能力が開発されることを否定しない。しかし肝心なことは、この「引神通定」は、第一の自分が本当の安らかさを得ること、すなわち権力や名譽や財産を得ようとしてあくせくしあせり騒いでいるような心ではなくることと、さらに第三の「隨利他定」という他の人の利益になることを目指すことへの集中・禪定と、いわばセットになっていることである（禪定については、すでに前章でも詳しく述べられたし、さらに第七章「本書第六章」でも別の角度から述べられるので、ここではこれだけにとどめる）。

智慧

そして第六は「智慧」である。他の五つの波羅蜜の實踐によって「智慧」の獲得が目指される。般若（智慧）も三種あるとされていて、第一は「無分別加行の般若」といい、まだ理論がわかり、すこし禪定の実践ができるようになった程度で、これから行を加えていかなければならない段階の智慧である。そして、實際の「無分別の般若」に到り、さらに第三は「無分別後得の般若」に到るのである。禪定によって一つの世界が見えたらそこで終わりではなく、さらに本来は一つのだが、仮に分かれてそれぞれにあるという世界が見えてくる。結局は妄想にすぎない分別知を超え、無分別智に到っても、それで完成ではなく、さらに般若後得智にまで到ってはじめて本当の智慧になる。

迷い・障害と方法の対応

迷いから覚りへという人間成長あるいは心理的転換は、どうしたら実現できるかというところ、以上のような六つの事柄を實踐すればいいというのだが、では、「なぜ波羅蜜はただ六つだけであるのか」。アサンガは問いを立て、それに答えて「それは、①六種の迷い・障害の対治を確立することが目的だからである。

②また、一切の仏法が発生するための依りどころだから、③また一切の衆生と共にあって成熟させるための依りどころだからである」と言う（以下の引用は、一二六頁以下）。

①は、迷い・障害が基本的に六種類だから、それに対応して対治（対処・治療すること）の方法も六種類になるのだという。

(1) まず、「修行しよう」という心を起こさない原因を対治するために、布施（Ⅱほどこし）と持戒（Ⅱ戒律を守ること）の二つの波羅蜜を設定する。修行しようという心を起こさない原因とは、財産や家に執着することである」。

ものが実体として存在すると思うと、それを所有できると思い、所有できれば、幸福になれると思う。そしてそれを追求することに自分のエネルギーや時間のほとんどを費やすことになる。常識的にはそれほどがいけないのかと思うだろうが、それではより深い真理の世界に入ることにはできない。より深い世界に入りたのだったら、執着を捨てなければならぬ。まずそのために、布施をするのだという。つまり初歩の布施は、人のためではなく、自己成長のためにするということに重点がある。

また、自己成長のためにならないものを避け、ためになることをする、つまり自分のために自分で自分を律するというのが持戒の本質である。

(2) 「もしすでに修行しようという心が起こっているならば、退行する心の原因を対治するために、忍辱（Ⅱ耐え忍ぶこと）と精進（Ⅱ努力すること）の二つの波羅蜜を設定する。退行する心の原因とは、すなわち生死輪廻する衆生が逆らい迫害するという苦しみと、長い間、善なる法を支持する修行を加えることによる疲労である」。

これは、ほとんど解説の必要はないだろう。まわりの人に反対され、軽蔑され、それどころか迫害を加えられると、修行するのが嫌になってしまう。また、修行を持続していると、あまりに長くかかるので疲れきってしまうことがある。しかし、それでは覚れない。覚りたいのなら、心を奮い立たせて耐え忍び努力を続けるほかない。

(3) 「もしすでに修行しようという心とまた退行することのない心が起こっているならば、それが壊れ失

われる心の原因を対治するために、禪定と智慧の二つの波羅蜜を設定する。壊れ失われる心の原因とは、すなわち心が散乱することと誤った知恵とである。

そして、禪定によって深く静かな安らぎを得て心のエネルギーを取り戻し、常識を超えた智慧によって、なぜそんなにまでして六波羅蜜を実践するのか、繰り返し思い出す。そうすることによって、修行の心、退行しない心を保つことができるのだという。

「このように、六つの迷い・障害を対治するために、波羅蜜には六つあるといわれる」。以上のように説明されると、なるほど覚りのための方法が六つあるのはたまたまというのではないことがわかる。

②続いて、「『一切の仏法が発生するための依りどころだから』というのは、前の四つの波羅蜜は散乱しないことの原因であり、次の一つの波羅蜜は散乱しないことの本体である。この散乱しないことを依りどころとするので、ありのままにもろもろの存在の真理を覚りおえ、一切の如来の正しい教えが生起することができると。それゆえに、一切の仏法が発生する依りどころとして、波羅蜜に六つあるとするのである」という。

これも明快でほとんど解説の必要はなさそうだが、念のために少しだけ解説しておこう。「散乱しないこと」というのは、心が分離したばらばらのものがあるという錯覚に陥らないということである。前の四つの波羅蜜は、心を分離思考に陥らせないための原因あるいは基礎になるものであり、禪定は一つの世界へ集中することそのものであり、禪定によって、すべてが一つにつながりながらそれぞれのかたちを現わしていること、すなわち「もろもろの存在の真理」への目覚め＝智慧を得ることができると。あらゆる仏＝覚者の教えは、その智慧から生まれるのである。

③最後に、「また一切の衆生と共にあって成熟させるための依りどころだから」というのは、布施波羅蜜によって衆生に利益を与え、持戒波羅蜜によって衆生に害を与えない。忍辱波羅蜜によって彼らの迫害をあまんに受け、恨みに報いる心を起こさない。精進波羅蜜によって、彼の善の機能を生えさせ、彼の悪の機能を枯らす。こうした利益を原因として、一切の衆生をみな教育・調整することができる。次に彼の心がまだ静寂さを得ていないならば、静寂にさせるために、すでに静寂を得ているならば解脱させるために、禪定と智慧という波羅蜜を立てる。これら六つの悟りの彼岸へ到る手段（六度＝六波羅蜜）によって、菩薩はよく衆生を教える。それゆえに、成熟させることができる。これを「一切の衆生と共にあって成熟させるための依りどころ」と名づける」とある。

これは、きわめてわかりやすいので、解説は略すが、一言だけ言っておくと、③にはっきり現われているように、大乘の覚りはたえず自分から始まって他者へ及ぶものと捉えられている。始めから「人のため」というのでなく、しかしいつまでも「自分のため」にとどまるのではない。「自利利他」という言葉でまとめられるような、大乘の精神がここでもはっきりと示されているのである。

そして、まとめとしてアサンガは、「波羅蜜の数が六つあるとするのは、こうした意味によるのである。このように、波羅蜜を立てるについて数が六つあることを知るべきである」と言っている。

修得の段階

こうした六波羅蜜を心を込めて実践していくと、最初はまねごとだが、だんだんそれが腹の底・アーラヤ識の底に滲みできて、アーラヤ識の質が次第によくなり、根本的なところまでいくと、仏へと転換する。

しかし、そういうふうには、根本のところには煩悩の種子が膨大に溜まっているのを一度すべて洗い流して、覚りの種子にぜんぶ置き替えなければならない。これは、言葉で言うことはたやすいが、実際にはきわめて困難で、「そんなことは不可能だ」と言いたくなるかもしれない。

しかしここでもアサンガは、用意周到に注意を繰り返している。

六波羅蜜を依りどころとすることによって、菩薩は唯識の境地に悟入しおえると、次に清浄な信じ願う心に属する六波羅蜜を獲得する。それゆえに、その中間において、たとえ六波羅蜜の修行を加える意図的努力を離れることがあっても、正しい教えを信じ願うので、尊重し、喜んで従い、得ることを願い、思惟するゆえに、つねに休むことなく実践するゆえに、六波羅蜜を習い身につけて、究極に到り、完成させる。(二二五―六頁)

まず真似事であっても初歩的な六波羅蜜を実践すると、程度はともかく自分の心と離れて何かがあるのではない、すべては心だということに気づく。その気づきには、心を覆っていた暗い雲が晴れたような爽やかさが伴うものである。一度そういう爽やかさを体験すると、また体験したくなる。さらに心の底まで滲み通らせていっそう完全な清々しさを得たいという願いが起こる。そういう深く切実な心が動機となつて、さらに六波羅蜜を実践するようになる。もはや無理をした意図的努力をしなくても、したくするのだから、怠けたり挫折したりすることはなくなる。願ひ喜んで、持続するならば、どんなに遠くても、やがては必ず目的地に到り着くのだという。

そしてアサンガは、修行者たちを励ましてこう言う。

菩薩は真理の流れのなかにあり 前後に諸仏がいますことを見て すでに「自分についても」覚り（菩提）がまちかであることを知る 困難なことではなく得やすいからである。（二二六頁）

これは、すでに修行を始めている人間にとっては、深い慰めと励ましの言葉である。たとえわずかでもすでに修行を始めていることは、すでに真理の流れの中に入っていることであり、である以上、すでに覚りもまちかなのだという。しかもイメージを使った瞑想法の実践において、過去・現在・未来に無数の覚った人諸仏が存在することをありありとしたイメージとして体験すると、それは私にも可能だと感じることが出来る。決して安易にということではないが、もう、真理の言葉を聞いたこともなく、実践の法も知らず、途方に暮れていた時のような絶対的な困難はない。しかも自分が人間として成長していく時の、喜びや手応えを知っているのだから、やりたくてやり続けられるのだ。それは、ある意味でたやすいことだという。

しかもそれは、突然のジャンプはできなくても、根気強く段階を踏んで順に行けばいいのだという。そこが「一超直入如来地」（如来の境地まで一飛びに入る）といった禅の言い方と非常に違っている。修行の段階については、第三章でも少し触れられていたし、次の章全体がそれに費やされているので、詳しくはそこで述べることにして、ポイントの部分だけ引用しておこう。

もし略して説くならば、修得には五種類あると知るべきである。……第五は、他を利益することの修得である。これらのなかの前の四つの修得についてはすでに前に述べたとおりに知るべきである。

他を利益することの修得とは、すなわち仏の無作為の心で、如来のことを捨てないということである。
(一三二―一三頁)

ここでも、修得の最終段階は「他を利益すること」である。しかも、私が他の人のためにいいことをし
てあげるといった人為・作為の心なしに、如さまにそこに（衆生と共に）、来り存在している、というこ
とから離れないというのである。六波羅蜜の実践の究極の目的は、ごく自然にありのままにありながら、
しかもそれが他者にとって救いとなるような人間になることなのである。これをもし人間成長の理想的な
到達点と言ひ換えるとすれば、何と高い理想であろう。もし私たちが、「撰大乘論」の全体像をよく理解
できないままだと、人間には実現不可能な理想にすぎない、ほとんど空想のように思えるかもしれない。
しかしアサンガは、そうした疑いにもみごとに答えていく。

終わりのない実践

アサンガを含め、古代インドの修行者たちは、現代人のように、今生の短い時間だけでものを考えてい
ない。果てしない輪廻の中で、生まれ変わり死に変わり、終わることのない修行を続けることをイメージ
しているのである。「もろもろの波羅蜜を修得して完成の段階に到っても、さらにもろもろの波羅蜜を修
行していく」(一三三頁)。この気の長さは、どちらかというといふ気の短い日本人、それも現代人には想像を
絶するところがあるかもしれない。

しかし私は、以下のような文章に出会った時、その意志の持続の果てしない長さのイメージに深い感動
を覚えた。「一生努力してみたが、やっぱりダメだった」などと言うのは、大乘仏教では「意志」「志」と

は言わないのだ。このくらいの無限のタイム・スケールで意志するのを「意志」と言うのだ。何という壮大な思想だろう、と思つたものである。これもまた解説は不要だと思つるので、長くなるが、その個所を引用しておこう。

また次に思惟の修得とは、尊重し、共に喜び、得ることを願うという思惟であつて、六つの意志を含んだ修行である。六つの意志とは、第一は広大な意志、第二は長い時間の意志、第三は歓喜の意志、第四は恩徳がある意志、第五は大きな志の意志、第六は善意という意志である。

広大な意志とは、菩薩は数大カルバにこの上ない悟りを得るが、そうした時間を一瞬とする。菩薩はそうした時のなかで、一瞬一瞬に身命を捨て、ガンガー河（ガンジス）の砂の数に等しいほどの世界のなかに満ちている七種類の宝を捧げて如来に供養し、発心してから究極の清らかな悟りに悟入するに到つても、この菩薩の布施の心はなお満足しない。このように多くの時の一瞬一瞬に、三千大千世界に明るい灯を満たし、菩薩はそのなかで歩き、止まり、坐り、臥すことについて四つの威儀を保ち、一切の生命を維持するために必要なものがないときにも、菩薩は、持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の心をつねにありありと修行し、究極の清らかな悟りに悟入しても、この菩薩の持戒・忍辱などの意志は満足しない。これは飽き足りることのない心であつて、これを菩薩の広大な意志と名づける。

もし菩薩が初発心から成仏に到るまで、飽き足りることのない心を捨てなければ、これを菩薩の長い時間の意志と名づける。

もし菩薩が六波羅蜜によつてなす他を利益することについて常に等しいものがない歓喜を生じ、衆生が利益を得てその心が歓喜するのにも及ばないほどであれば、これを菩薩の歓喜の意志と名づける。

もし菩薩が六波羅蜜を實踐して衆生を利益しおわり、衆生は自分が大きな恩徳を受けたと思うにもかかわらず、「菩薩」自身は彼に対して恩を与えたとは思わないならば、これを菩薩の恩徳のある意志と名づける。

もし菩薩が六波羅蜜から生ずる功徳や善の機能を一切の衆生に施し与え、執着なき心をもって志向し、彼に愛すべき報いを得させるならば、これを菩薩の大なる志の意志と名づける。

もし菩薩が實踐した六波羅蜜の功徳・善根を、一切の衆生に平等にみな得させ、彼をこの上ない悟りに廻向（向きを変え）させるならば、これを菩薩の善意という意志と名づける。

この六つの意志に含まれる愛し尊重する思惟によつて、菩薩は修行・修得していくのである。

(一三二—一三三頁)

次章で述べるが、「カルパ・劫」というのは、古代インドのほとんど誇大妄想ではないかと思いたくなるほど長い時間の単位である。しかし、菩薩・ボーディサットヴァとは、そのくらい果てしなく、あきらめず、くじけず、飽き足りず、修行し続けようという「覚りへの志を持つ存在」なのである。今生で運よく仏教に出会い、真理の言葉を聞くことができ、六波羅蜜の實踐を始めても、昨日・今日や一年や二年どころか、今生すべてをかけても覚れないかもしれない。だが、このくらい果てしなく修行し続ければ覚れるというのだ。

ここまで言われると、「それはそうかもしれないが、私はもういい。疲れてしまふ」という感じが出てくるだろう。

ところが、唯識はここでも心憎いまでに用意周到である。すでに引用した個所に「長い間、善なる法を

支持する修行を加えることによる疲労」という句があった。「疲労」と訳したのは漢訳は「疲怠」である。疲れて、「もう嫌だ。もういい」という気分になることを、アサンガら修行者たちは自分のこととして痛いほど知っていたのではないだろうか。その句に対する「撰大乘論積真諦訳」に以下のような注釈がある。漢訳書き下しで引用しよう。

精進の行は久遠時の中に於て、一切の善を修す。若し衆生に於て慈悲心無ければ、自身を愛惜し、修行する所に勝れたる功德有ることを見ざるが故に、修行する所の中に於て疲怠の心を生ず。此の心有るに由りて精進すること能ず、即ち是れ懶惰なり。懶惰は即ち是れ退弱心の因なり。

ほとんど永遠にあらゆる善を實踐するのが精進だが、衆生に対する慈悲の心なしたと、我が身可愛さが出てくる。そして実践には必ず効果があることがわかっていないと、疲労を感じ怠りたくなってくる。そうすると一心不乱の修行ができなくなり、面倒になる。修行が面倒になったとき、退行する心が起こる、というのである。

自分一人のための修行は、自分が嫌になれば、そこで弛緩—中断—挫折してしまいがちである。私たちは、自分もひとまばらばらに分かれていますと思込んでいるから、「衆生」とか「他」と言うとき、もう自分とは別のものであり、したがって、「なんでオレがひとのために苦勞や損ばかりさせられて、疲れなきやいけないんだ」という気分になってくる。だが、衆生のため、つまり自分も含む生きとし生けるものすべてのため、自分たちのため、そういう慈悲のためならば、そうはならない、できない。

また、「それが何の役に立つんだ」と思うと嫌になってくるが、やがて必ず効果が出てくることかわ

かかっていれば、耐え抜くことができるのである。

実践の効果について

第四章の終わり近く、六波羅蜜の実践にはどんな効果があるかを述べて、アサンガは修行者たちを励ましていく。

もろもろの波羅蜜の功德はどのようなものだと知るべきであろうか。

もし菩薩が生死輪廻するとしても、大いなる富を思いどおりにできる。大いなる人生を送ることができる。大いなる親族や家来を得る。大いなる生活の糧の事業が成就する。病氣や悩みがなく、少欲でありうる。一切の技術的な智慧を得る。思いどおりであり、富を失うことなく、衆生を利益することとをなすべきこととするので、菩薩の六波羅蜜を修行する功德は、究極の清らかな悟りに悟入するまで、常にあって変わることがないからである。(一三六頁)

だが、ここまで来て、ある種の感動は覚えたにしても、輪廻を信じていない現代人には納得できない部分が残るだろう。「輪廻なんか神話であって、本当は人間死んだら終わりなのだ。その短い人生をなんでそんなに苦勞しなければならぬんだ。もっと楽に生きたほうがいいではないか」と。そのあたりの問題について、第三章でも少し述べたが、次章でも述べていきたいと思う。

第五章 菩薩の発達段階論（十地）とは何か

修行の完成にかかる時間

第四章までで、原理論と実践論がひととおり終わった。続いて第五章で、アサンガは菩薩から究極の仏の境地に入るまでを十段階に分けて述べている。いわば実践による「成長・発達の段階論」で、「華嚴經」などで展開された大乘の菩薩の十地説じゅうじきょうに唯識的な解釈を加えたものである。

これは修行をすでに始めており、たとえ初歩の初歩であっても菩薩だという自覚があれば、どんなに遠い先のことではあっても自分の未来に関わることとして関心を持てるかもしれないが、始めていない方には、こんなこともあるのかという感じで、もう一つ実感が湧かないだろう。私にとってもこの章は、『撰大乘論』の中でもっとも読みこなせない部分だった。

しかし、もう二十年近く、何度も読んでいくうちに、「これはやはり人間を突によく捉えた考え方だ」と思うようになった。その内容については以下徐々に述べていくが、前章でも述べたように、これは私たちの日常感覚とはまったく違う、きわめてスケールの大きな、気の長い話である。

なにしろ、まず初地しょち、すなわち最初の段階に入るだけでも大変な時間がかかることになっている。どの

くらい大変かという、いったん人間と生まれ、仏教を学ぶ機会に恵まれ、それをある程度理解し信じていることができたら、初歩的な覚りの目が開けたという段階まで行くだけで、一カルバ・一劫かかるというのである。

古代インド人は、物事をほとんど誇大妄想ではないかというくらいに大きく、大げさに考えるところがあり、時間についても気の遠くなるような長い時間の単位を考えている。それが「カルバ」で、漢訳で音写したのが「劫波」であり、「波」が省略されて「劫」という。それは想像を絶するほどの長さだが、あえてそれをいくらかでも想像できるように工夫された譬えがいくつもある。その中でも私が気に入っている譬えがあつて、他の本でも紹介したが、本書の読者のために再度紹介しておこう。

古代インドの王が象に乗り軍隊を一日進軍させる距離がある。象は大きな体で、人間よりもはるかに早いスピードで歩くから、一日におそらく十キロや二十キロ以上の距離を歩くだろうが、その距離を「一里」とする。そして縦、横、高さがそういう一里の大きさの大磐石があるとすると、これは、チョモランマやマッターホルンも遙かに及ばない、そびえ立つ岩山である。その岩山に、百年に一度、天上界から天女がやってくるという。天女は空を飛んでいてほとんど重力と関係のない世界に生きているわけだが、その軽やかさで岩山の上を羽衣でふわっとひと撫でして帰っていく。そんなことでは岩にはほとんど何の影響もないようだが、それでも物が触るから、ほんのかすかにでも岩が擦り減るだろうというのだ。そして、その岩山が羽衣で撫でられたために擦り切れて無くなるまでの時間が「一カルバ」である。

それから、もう一つの譬えでは、縦、横、深さ一里の升を考える。その升に、ケシの実というまるで粉のような小さな実を百年に一粒ずつ入れていき、升が一杯になるのにかかる時間が「一カルバ」である。

現代の科学的な宇宙論では宇宙は始まってから一五〇億年くらい経っているというが、これはもしかす

るとそれに負けにくい長い時間である。

そして、修行を始めてから菩薩の十地が終わるまでに、少なく見積もってもその三倍、三カルバかかるという。それどころか、説によっては七カルバ、さらに三十三カルバという説もある。宇宙論的な長さを感じていただくために、その個所を引用しておこう。細かい解説は省くが、ぜひ飛ばさないで、その感じを味わいながら読んでいただきたい。

どのくらいの時間をかけて十の段階を修行すると、正しい修行が完成されるのか。五種の人がある。三大カルバかけて修行して完成する。あるいは七大カルバ、あるいは三十三大カルバともいう。

五種の人とはどういうことか。願樂の段階の修行をする人は、一大カルバかけて完成する。清浄な心の行を修行する人と、相のある行を修行する人と、無相の行を修行する人とは、第六から第七の段階において、二番目の大カルバをかけて完成する。これからは、効果をあてにしない行を行なう人で、第十の段階に到るまで三番目の大カルバをかけて完成する。

また次に、なぜ七大カルバなのか。「十」段階の前に三あり、段階のなかに四ある。段階の前の三とは、第一に「善悪の性質の」不定なカルバ、第二に定まったカルバ、未来の悟りが保証された（授記）カルバである。段階のなかに四あり、第一は実際の真理によるカルバ、第二は「煩惱を」捨て去るカルバ、第三は静寂によるカルバ、第四は智慧によるカルバである。

また次に、なぜ三十三大カルバなのか。方便の段階に三カルバがある。第一は信を行なうカルバであり、第二は精進を行なうカルバであり、第三はありのままの真実に向かう行ないのカルバである。十段階のなかのそれぞれの段階はおのおの三大カルバである。「それぞれの段階に」入ると留まるの

と出るのとである。

このようなカルバに修行して、十段階の正しい行を完成するのである。

(一四六頁)

そして最後は、「善根と願の力があり／心を堅くして進んで成長するならば／三種のカルバに正しい行が／成就すると説かれる」という詩句で結ばれている。この「心を堅くして進んで成長するならば」という言葉の響きが空恐ろしい。逆に言えば「……しないならば……成就しない」のだからである。

前にも言ったが、つまり唯識は、人間の悪しきカルマの底知れない深さを見据えていながら、なおかつ「果てしなく修行を続ければ、人間はやはり覚れる」と見ているのだ。これは、もはや楽観論でも悲観論でもなく、その両方を超えていると思う。

人間という存在がどのくらいひどいものか、歴史を学べば学ぶほど実感させられる。見方によっては、人間はいいこともいくらかはやってきているが、ほとんどろくでもないことばかりやってきたのではないか、人類など地上に存在しなかったほうがよかったのではないかと気がえするほどである。

例えば、有史以来、地球上で人類が戦争をまったくやっていた時はないか、数千年にわたって、どこかで必ず戦争をし続けているようだ。その中で、それこそ無数の人殺しが行なわれてきている。人間が人間という仲間を殺すということが現に起こってきている。あるいは、人間が人間という仲間を奴隷にする、搾取するといったことが、おそらく文明が始まって以来少なくとも五千年にわたって行なわれてきた。そうした人間の姿を見ていくと、「人間はどうしても自分の力で自分を救うことなどできない」と思いたくなる。

そういう人間の愚かさ、悲惨さ、残酷さがどれほどひどいか、仏教——唯識はたじろぐことなく厳しく見

つめてゐる。だが驚くべきことは、さらに「それでも、三カルバかけたら、覚れる」と主張しているのだ。「五千年でダメでも、三カルバかければ大丈夫だ」と言うのである。

私は、唯識の人間の心を見る目は恐ろしいほど確かだと思ふ。こう見た時、大きくは人類から身近には自分自身の人生に到るまで、樂觀的でも悲觀的でもないものの見方が可能になってくる。そしてそれは、きわめてリアルな人間観だと思ふのである。

三カルバはともかく、少なくとも仏陀が生まれてから二千五、六百年経っても、覚りを開いた人が人類の中にそれほど多くいるようには見えない。二千年ほど前にイエスという人が出てきて、愛について一懸命説いても、キリスト教国が愛に満ちた国になったようにも見えない。つまり、人類というものは、二千年や三千年修行しても覚りが開けないのが事実というか、そもそも人類の大多数は修行する氣にさえなっていないというのが事実だから、それを考えると、修行する氣になっても三カルバという表現が当てはまるくらいの長い長い時間がかかるというのは、そのとおりだという氣がする。

そういう人間の現実にもかかわらず、なぜ唯識は「三カルバかける氣があれば、覚れる」と言うのか、私たちは第一章からずっと体系的に学んできた。私たちが覚るか迷うかを決めるものは私たちの心の奥深くに蓄えてきたカルマ・種子であり、それがどう芽を吹くかである。そして、人間は、長い時間の間、ほとんど迷いの種しか植えてきてない。だから、迷いの芽しか芽吹かず、迷いの花しか咲かないのは当たり前なのだ。だがそれは、そこに覚りの種を植えていくならば、やがて覚りの芽が吹いてくる根拠でもあった。

そして、仏教では輪廻転生があることになっているから、生まれ変わり死に変わり、ほとんど果てしなく、つまり三カルバかけて修行するのだと決心してしまえばいい。今生で覚るか悟れないか、唯識を学